

きゅうり

—— 発病・加害時期  
 == 発病・加害最盛期

作型・病害虫名	月											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
普通 炭褐べう 炭病 灰斑病 疫モザ化 黄つつアハコ ミミネウ トマト そ斑とんか細立イえ 枯イえ核 ラムニ ジロアザ キイロアザ キイロアザ ブセ ノメイガ (ワハリノメイガ) ハモグリバエ こび菌性クそ 割枯 シニ ミミウマ ミミウマ ユウ (ワハリノメイガ) リバエ				トンネル被覆 ○ ○			●▲ は種定植	■ 収穫	■			
ハウス抑制 炭褐べう 炭病 灰斑病 疫モザ化 黄菌 アハコ コミミ ナミ ネウ トマト そ斑とんか細立イえ核 枯イえ核 ラムニ ジロアザ キイロアザ キイロアザ ブセ ノメイガ (ワハリノメイガ) ハモグリバエ こび菌性クそ 割枯 シニ ミミウマ ミミウマ ユウ (ワハリノメイガ) リバエ								●▲ 接木	■			

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

## 苗立枯病

### 留意事項

- 1 病原菌は、リゾクトニア菌、ピシウム菌などである。
- 2 タチガレン液剤は、ピシウム菌、フザリウム菌に有効である。
- 3 モンカットフロアブル40は、リゾクトニア菌に有効である。
- 4 SDHI剤（**7**）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

### 防除方法

- 1 床土は毎年更新する。
- 2 苗床にほ場から採取した土を使用する場合は、土壤消毒する。（XⅢ土壤消毒2参照）
- 3 未熟な堆肥は発病を助長するので、完熟堆肥を施用する。
- 4 土壤が過湿にならないように、かん水量に注意する。
- 5 被害株は早期に除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- 6 は種前の種子に、下記の薬剤を粉衣または浸漬する。
  - ・ **オーソサイド水和剤80** **M4** 【種子重量の0.2～0.4%粉衣 は種前／1回】
  - ・ **ベンレートT水和剤20** **M3** **1**
    - 【乾燥種子重量の0.4%粉衣 は種前／1回】または
    - 【20倍 30分間浸漬 は種前／1回】
- 7 は種直後に、下記の薬剤を3L／㎡土壤かん注する。
  - ・ **タチガレン液剤** **32** 【ピシウム菌、フザリウム菌 500～1,000倍 は種直後／3回】
  - ・ **モンカットフロアブル40** **7**
    - 【リゾクトニア菌 1,000～2,000倍 は種時～子葉展開時／1回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を2L／㎡の割合で、ジョウロなどでかん注する。
  - ・ **オーソサイド水和剤80** **M4** 【800倍 は種後（2～3葉期）／5回】

## 炭そ病

### 留意事項

- 1 気温22～24℃で多湿のときに発病しやすく、降雨により飛散する。
- 2 予防散布が大切である。
- 3 QoI剤（**11**）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。
- 4 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 5 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤はかぶれに注意する。
- 6 アミスター20フロアブルは、浸透性を高める展着剤を加用しない（薬害）。

### 防除方法

- 1 連作を避ける。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 2 排水を良好にする。
- 3 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングする。
- 4 窒素質肥料の過用を避ける。
- 5 古い葉や、巻きひげが発生源になるので除去する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
  - ・ [ベルコート水和剤](#) M7 【2,000～4,000倍 前日／7回】
  - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) M3 【600倍 前日／3回】
  - ・ [ダコニール1000](#) M5 【1,000倍 前日／12回】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [トップジンM水和剤](#) 1 【1,500～2,000倍 前日／5回】
  - ・ [アミスター20フロアブル](#) 1 1 【2,000倍 前日／4回】

## 褐斑病

### 留意事項

- 1 高温、多湿のハウス栽培で発生が多い。
- 2 病原菌は土壌中に残るか、農業用資材に付着して越冬し、伝染源となる。
- 3 種子伝染する。
- 4 予防散布が大切である。
- 5 台風襲来後に多発しやすい。
- 6 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 7 SDHI剤（7）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

### 防除方法

- 1 前年の発生が多かった場合は、定植前に支柱等の消毒を行う。（XIV農業用資材の消毒 参照）
- 2 ハウス内の換気を良好にし、過湿にならないよう注意する。
- 3 天井フィルムからの結露水のポタ落ちで発病が助長される。
- 4 窒素過多、肥効切れにならないよう適正な肥培管理に努める。
- 5 被害葉・老化葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
  - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) M3 【600倍 前日／3回】
  - ・ [ベルコート水和剤](#) M7 【2,000倍 前日／7回】
- 7 発生を認めたら直ちに下記の薬剤を散布する。
  - ・ [カンタスドライフロアブル](#) 7 【1,500倍 前日／3回】
  - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) M5 40 【1,000倍 前日／3回】
  - ・ [パレード20フロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

## べと病

### 留意事項

- 1 気温20～24℃で発生が多い。
- 2 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 予防散布が大切である。
- 4 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤はかぶれに注意。
- 5 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は、3回以内。
- 6 アミスター20フロアブルは、浸透性を高める展着剤を加用しない（薬害）。
- 7 QoI剤（1 1）、SDHI剤（7）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

### 防除方法

- 1 密植を避け、通風・透光を良くする。
- 2 排水を良好にし、過湿を避ける。
- 3 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 窒素過多・肥料切れにならないように、肥培管理に注意する。
- 5 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
  - ・ [ジマンダイセン水和剤](#)、[ペンコゼブ水和剤](#) M 3 【600～800倍 前日／3回】
  - ・ [ランマンフロアブル](#) 2 1 【1,000～2,000倍 前日／4回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [リドミルゴールドMZ](#) M 3 4 【1,000倍 前日／3回】
  - ・ [アミスター20フロアブル](#) 1 1 【1,500～2,000倍 前日／4回】
  - ・ [エトフィンフロアブル](#) 2 2 【1,000倍 前日／4回】
  - ・ [ホライズンドライフロアブル](#) 1 1 2 7 【2,500倍 前日／3回】
  - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) M 5 4 0 【1,000～1,500倍 前日／3回】
  - ・ [ライメイフロアブル](#) 2 1 【2,000～4,000倍 前日／4回】
  - ・ [ベトファイター顆粒水和剤](#) 2 7 4 0 【2,000～3,000倍 前日／3回】
  - ・ [ベジセイバー](#) 7 M 5 【1,000倍 前日／3回】
- 7 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除1（1） 参照）

## うどんこ病

### 留意事項

- 1 ハウス栽培で、日照不足、乾燥時に発生が多い。
- 2 昼夜の温度差が大きくなると発生が多い。
- 3 ブルームレス台木では、うどんこ病が発生しやすい。
- 4 葉裏から発生するうどんこ病もあるので注意して観察し、発生初期の防除に努める。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 ハウス内では高温に伴う薬害を生じやすいので、換気を十分に行ってから薬剤を散布する。
- 6 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 7 SDHI剤（**7**）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

#### 防除方法

- 1 ハウス内の換気を良好にする。
- 2 被害葉は早めに除去し、通風を良くする。
- 3 抵抗性品種を用いる。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
  - ・ [ベルコート水和剤](#) **M7** 【2,000～4,000倍 前日／7回】
  - ・ [フルピカフロアブル](#) **9** 【2,000～3,000倍 前日／4回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [アフエットフロアブル](#) **7** 【2,000倍 前日／3回】
  - ・ [トリフミン水和剤](#) **3** 【3,000～5,000倍 前日／5回】
  - ・ [プロパティフロアブル](#) **50** 【3,000～4,000倍 前日／3回】
  - ・ [ベジセイバー](#) **M5** **7** 【1,000倍 前日／3回】
  - ・ [カリグリーン](#) **NC**
    - 【野菜類（除トマト、ミニトマト） 800～1,000倍 前日／—】
  - ・ [プロポーズ顆粒水和剤](#) **40** **M5** 【1,000倍 前日／3回】
  - ・ [パレード20フロアブル](#) **7** 【2,000～4,000倍 前日／3回】
  - ・ [パンチョTF顆粒水和剤](#) **3** **U6** 【2,000倍 前日／2回】
- 6 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。（Ⅻ省力安全防除1（1） 参照）

## 灰色かび病

#### 留意事項

- 1 ハウス内が低温（20℃くらい）で多湿の時、発生が多い。
- 2 予防的に散布する。
- 3 薬剤耐性菌が出現しやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 4 SDHI剤（**7**）は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

#### 防除方法

- 1 ハウス内の換気や排水を良好にし、過湿にならないように注意する。
- 2 わらまたは、ポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 3 咲き終わった花卉や被害葉・被害果を早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- ・ [ベルコート水和剤](#) M7 【2,000～4,000倍 前日／7回】
  - ・ [フルピカフロアブル](#) 9 【2,000～3,000倍 前日／4回】
- 5 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
- ・ [トップジンM水和剤](#) 1 【1,500～2,000倍 前日／5回】
  - ・ [セイビアーフロアブル20](#) 12 【1,000～1,500倍 前日／3回】
  - ・ [ピクシオDF](#) 17 【2,000倍 前日／4回】
  - ・ [パレード20フロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】
  - ・ [ロブラール水和剤](#) 2 【1,000～1,500倍 前日／4回】
- 6 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅷ省力安全防除1 (1) 参照)

## 斑点細菌病

### 留意事項

- 1 種子、被害茎葉が伝染源で、菌の発育適温は25～27℃で低温でも繁殖する。
- 2 キノンドーフロアブルは、水産動植物に強い影響を与える恐れがあるので、河川、湖沼及び海域等に飛散、流入しないよう注意して使用すること。
- 3 カスミンボルドー、銅シン水和剤は、幼苗期や高温時の散布、連続散布を避ける(薬害)。
- 4 カスミンボルドー、銅シン水和剤の成分カスガマイシンの総使用回数は、5回以内。

### 防除方法

- 1 ウリ科の連作を避ける。
- 2 支柱などの資材をケミクロンGなどで消毒する。(XIV農業用資材の消毒 参照)
- 3 排水を良好にし、過湿にならないようにする。
- 4 病原菌のはね上がり防止のために、わらやポリフィルムでマルチングを行う。
- 5 被害茎葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 発生が見込まれる時期に、下記の薬剤を予防的に散布する。
  - ・ [キノンドーフロアブル](#) M1 【1,200～1,500倍 前日／5回】
  - ・ [ジーファイン水和剤](#) NC M1 【750～1,500倍 前日／—】
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [カスミンボルドー](#)、[銅シン水和剤](#) 24 M1 【1,000倍 前日／5回】

## 疫病・立枯性疫病

### 留意事項

- 1 比較的高温(気温25℃前後)で降雨後などの多湿条件下で発生が多い。
- 2 ハウスきゅうりでは立枯症状となることが多い。
- 3 カボチャに接ぎ木すると被害を軽減できる。
- 4 ジマンダイセン水和剤は、かぶれ注意。

注1: 同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2: 異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 5 ジマンダイセン水和剤・ペンコゼブ水和剤の成分マンゼブの総使用回数は3回以内。

#### 防除方法

- 1 床土は、新しいものを使う。
- 2 肥効切れしないように、肥培管理に注意する。
- 3 栽培期間中過湿にならないように、かん水や排水に注意する。
- 4 雨水などの、はね上がり防止のために、わらやポリフィルムなどでマルチングを行う。
- 5 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 6 苗床、本ぼを太陽熱消毒する。
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を土壌かん注する。
  - ・ [プレビクールN液剤](#) 28
    - 【立枯性疫病 400倍 3L/m<sup>2</sup> 苗床：は種直後、本ぼ：定植直後及び生育初期(21日) / 3回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を発病初期に葉裏、地ぎわ部に十分かかるように散布する。
  - ・ [ジマンダイセン水和剤](#) M3 【疫病 600倍 前日 / 3回】

## モザイク病

#### 留意事項

- 1 本病の主な原因ウイルスはキュウリモザイクウイルス (CMV)、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV) である。
- 2 生育初期の感染による被害が大きい。
- 3 管理作業（ハサミによる摘心など）による汁液付着でも伝染する。
- 4 施設栽培では、カボチャ台木の接ぎ木栽培でズッキーニ黄斑モザイクウイルス (ZYMV) 等に単独または重複感染すると萎れ症状を起こすことがある。

#### 防除方法

- 1 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 2 苗床は寒冷しゃで被覆し、有翅アブラムシ類の侵入を防ぐ。
- 3 シルバーポリフィルムでマルチングを行い、有翅アブラムシ類の侵入回避を徹底する。
- 4 ハウス開口部には、寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）などを張り、有翅アブラムシ類の侵入を防ぐ。（アブラムシ類の項参照）
- 5 発病株への接触によりウイルスが伝搬する可能性が高いので、発病が疑われる株の作業は後回しにする。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

## 黄化えそ病

### 留意事項

- 1 本病の原因ウイルスはメロン黄化えそウイルス（MYSV）である。
- 2 ミナミキイロアザミウマ（1齢または2齢幼虫）がメロン黄化えそウイルス（MYSV）に感染した植物を吸汁することで保毒し永続伝搬する。経卵伝染はしない。また、種子や土壌からは伝染しない。
- 3 汁液伝染性は低いため、管理作業（ハサミによる摘心など）による汁液付着では伝染する可能性は低い。
- 4 生育初期の感染による被害が大きい。

### 防除方法

- 1 本病の原因ウイルスを伝搬するミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。（ミナミキイロアザミウマの項参照）
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。（速やかに抜き取るか地際で切断し、ビニール袋に入れ密封するなどして完全に枯死させてから処分する。）
- 3 アザミウマ類の生息場所となるほか、メロン黄化えそウイルス（MYSV）の感染源になるため、ハウス内や周辺の除草を行う。

## 退緑黄化病

### 留意事項

- 1 本病の原因ウイルスは、ウリ類退緑黄化ウイルス（GCYV）である。
- 2 黄化えそ病との明確な区別は、目視では困難である。本病の媒介昆虫のタバココナジラミと合わせて、黄化えそ病の媒介昆虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。

### 防除方法

- 1 ウリ類退緑黄化ウイルス（GCYV）を伝搬するタバココナジラミの防除を徹底する。（コナジラミ類の項参照）
- 2 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。（速やかに抜き取るか地際で切断し、ビニール袋に入れ密封するなどして完全に枯死させてから処分する。）
- 3 タバココナジラミの生息場所となるため、ハウス内や周辺の除草を行う。

## つる割病

### 留意事項

- 1 地温20℃以上で発生する。
- 2 接木栽培では、穂木の自根発生に注意し、台木（かぼちゃ）の子葉は活着後早めに摘み取る。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。



## 防除方法

- 1 発病地では数年間作付けしない。
- 2 植え傷みを少なくする。
- 3 排水を良好にする。
- 4 被害株は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 5 抵抗性台木を用いる。
- 6 苗床、本ぽを土壤消毒する。(XⅢ土壤消毒 参照)
- 7 下記薬剤の1,000倍液を1株当たり150～300mlかん注する。
  - ・ [ベンレート水和剤](#) 1 【定植前～定植1か月後／3回】

## つる枯病

### 留意事項

- 1 高温多湿時に発生が多い。
- 2 SDHI剤 (7) は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

### 防除方法

- 1 連作を避ける。
- 2 支柱などの資材をケミクロンGなどで消毒する。(XⅣ農業用資材の消毒 参照)
- 3 株元を高くし、株元のかん水を避け、地ぎわ部を乾燥させる。
- 4 排水を良好にする。
- 5 施設栽培では換気を良好にする。
- 6 被害株はまきひげも残さず早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [トップジンM水和剤](#) 1 【1,500～2,000倍 前日／5回】
  - ・ [ロブラール水和剤](#) 2 【1,000倍 前日／4回】
  - ・ [パレード20フロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】
- 8 下記の薬剤を発病初期に、罹病部をていねいに削り取って塗布する。
  - ・ [トップジンMペースト](#) 1 【原液 発病初期／5回】

## 菌核病

### 留意事項

- 1 ハウス栽培で多湿時に発生が多い。
- 2 QoI剤 (1 1)、SDHI剤 (7) は、耐性菌が出現しやすいので、1作1回程度の使用に努める。

### 防除方法

- 1 被害株は、菌核形成前にほ場外に持ち出し処分する。
- 2 ポリフィルムなどでマルチングを行う。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

- 3 肥効切れしないように肥培管理に注意する。
- 4 栽培終了後は、水をためて土中の菌核を腐らせる。水をためることができない場合は、太陽熱消毒を行う。
- 5 下記の薬剤を、発病初期から地表面にも十分散布する。
  - ・ [トップジンM水和剤](#) 1 【1,500～2,000倍 前日／5回】
  - ・ [ゲッター水和剤](#) 10 1 【1,500倍 前日／5回】
  - ・ [スクレアフロアブル](#) 11 【2,000倍 前日／3回】
  - ・ [セイビアーフロアブル20](#) 12 【1,000～1,500倍 前日／3回】
  - ・ [パレード20フロアブル](#) 7 【2,000～4,000倍 前日／3回】
  - ・ [ロブラール水和剤](#) 2 【1,000倍 前日／4回】

## アブラムシ類

### 留意事項

- 1 ワタアブラムシは、キュウリモザイクウイルス（CMV）、ズッキーニ黄斑モザイクウイルス（ZYMV）などを媒介する。
- 2 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 3 葉裏に十分に散布する。
- 4 スタークル粒剤・スタークル顆粒水溶剤、アルバリン粒剤・アルバリン顆粒水溶剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。

### 防除方法

- 1 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 2 施設では、開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、侵入を防止する。
- 3 下記の薬剤を施用する。
  - ・ [モスピラン粒剤](#) 4A  
 【0.5～1g／株 株元散布 定植時／1回】  
 【0.5g／株 株元散布 定植後（30日）／1回】
  - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4A  
 【1g／株 株元散布 育苗期／1回】または  
 【1～2g／株 植穴土壌混和 定植時／1回】  
 【1g／株 株元散布 生育期（収穫開始14日）／1回】
- 4 下記の薬剤をかん注処理する。
  - ・ [モベントフロアブル](#) 23  
 【500倍（25～50ml／株） 株元かん注 育苗期後半～定植当日／1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

5 発生初期に、下記の薬剤を散布する。

- ・ [コルト顆粒水和剤](#) **9 B** 【4,000倍 前日／3回】
- ・ [スタークル顆粒水溶剤、アルバリン顆粒水溶剤](#) **4 A** 【2,000～3,000倍 前日／2回】
- ・ [ベネビアOD](#) **2 8** 【2,000倍 前日／3回】
- ・ [ウララDF](#) **2 9** 【2,000～4,000倍 前日／3回】
- ・ [トランスフォームフロアブル](#) **4 C** 【2,000倍 前日／2回】

6 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅷ省力安全防除1 (1) 参照)

## ハダニ類

### 留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

### 防除方法

- 1 ハウス内や周辺の除草を行う。
- 2 下記の薬剤をかん注処理する。
  - ・ [モベントフロアブル](#) **2 3**  
 【500倍 (50ml／株) 株元かん注 育苗期後半～定植当日／1回】
- 3 発生初期から下記の薬剤を散布する。
  - ・ [マイトコーネフロアブル](#) **2 0 D** 【1,000倍 前日／1回】
  - ・ [バロックフロアブル](#) **1 0 B** 【2,000倍 前日／1回】
  - ・ [スターマイトフロアブル](#) **2 5 A** 【2,000倍 前日／1回】
  - ・ [カネマイトフロアブル](#) **2 0 B** 【1,000～1,500倍 前日／1回】
  - ・ [ダブルフェースフロアブル](#) **2 5 B** **2 1 A** 【2,000倍 前日／1回】
- 4 ハウス内では、くん煙剤の使用も有効である。(Ⅷ省力安全防除1 (1) 参照)

## コナジラミ類

### 留意事項

- 1 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- 2 オンシツコナジラミ、タバココナジラミが発生する。
- 3 多発すると、すす病が発生する。
- 4 タバココナジラミはきゅうりに被害（退緑小斑点の増加、癒合による黄化、草勢低下、収量減少等）を及ぼす「キュウリ退緑黄化病」の原因ウイルス（CCYV）を媒介する。
- 5 退緑黄化病は、タバココナジラミが低密度でも発生する。
- 6 ダントツ粒剤の成分クロチアニジンの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元処理及び定植時の土壌混和は合計1回以内、散布及び定植後の株元散布は合計3回

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

以内)。

- 7 「キルパー」は、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、①「前作のきゅうりのコナジラミ類まん延防止」または②「前作のトマトまたはミニトマトのコナジラミ類まん延防止」とした登録がある。適用内容は防除方法8を参照。

使用方法は、いずれも「予め被覆した内で、所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する」。(きゅうりの病害虫まん延防止目的でかん水処理する場合は、被覆はあらかじめ除去して行い、処理中ハウスは3日間密閉する。)

#### 防除方法

- 1 ハウス内や周辺の雑草を除去する。
- 2 施設では、開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、侵入を防止する。
- 3 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根する。施設内を除草した後、施設を2週間以上密閉して死滅させる。発生ほ場の収穫残さは、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 下記の薬剤を施用する。
  - ・ [ダントツ粒剤](#) 4 A  
 【1~2g/株 株元処理 育苗期後半/1回】または  
 【1~2g/株 植穴処理土壌混和 定植時/1回】
- 5 下記の薬剤をかん注処理する。
  - ・ [モベントフロアブル](#) 2 3  
 【500倍（25~50ml/株） 株元かん注 育苗期後半~定植当日/1回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【2,000倍 前日/2回】
  - ・ [アファーム乳剤](#) 6 【2,000倍 前日/2回】
  - ・ [ウララDF](#) 2 9 【2,000倍 前日/3回】
  - ・ [トランスフォームフロアブル](#) 4 C 【1,000~2,000倍 前日/2回】
- 7 ハウス内では天敵を利用する方法（放飼）もある。
  - ・ [スワルスキー](#) — (生)  
 【野菜類（施設栽培） 250~500ml（約25,000~50,000頭）/10a  
 発生直前~発生初期/—】
- 8 前作の栽培終了後から残渣撤去までに、コナジラミ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。
  - ・ [キルパー](#) 8 F
    - ①【適用病害虫（設定なし） 原液として60L/10a 前作の栽培終了後から残渣撤去まで（は種または定植の15日前）/1回】
    - ②【適用病害虫（設定なし） 原液として40~60L/10a 前作の栽培終了後から残渣撤去まで（は種または定植の15日前）/1回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

9 ハウス内では、くん煙剤も有効である。(Ⅷ省力安全防除1 (1) 参照)

## ミカンキイロアザミウマ

### 留意事項

- 1 露地でも越冬が可能である。
- 2 成虫は花によく集まる習性がある。
- 3 コテツフロアブルは、幼苗期（1～3葉期）には薬害を生じる場合があるので、使用しない。
- 4 「キルパー」には、「適用病害虫（設定なし）」で使用目的として、「前作の野菜類または花き類・観葉植物」の「アザミウマ類まん延防止」とした登録がある。  
※使い方等詳細は、「ミナミキイロアザミウマ」を参照。

### 防除方法

- 1 ハウス開口部には、寒冷しゃ（目合い0.4mm以下の白色ネットまたは0.8mm以下の赤色ネット）を張り、侵入を防ぐ。
- 2 ビニル等でマルチングを行い、土中で蛹化するのを防ぐ。
- 3 ハウス内や周辺の除草を行う。
- 4 下記の薬剤を施用する。
  - ・ [プリロツソ粒剤](#) 28  
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植時/1回】
- 5 下記の薬剤をかん注処理する。
  - ・ [モベントフロアブル](#) 23  
【アザミウマ類 500倍（50ml/株） 株元かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [グレースシア乳剤](#) 30 【アザミウマ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【アザミウマ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [ディアナSC](#) 5 【アザミウマ類 2,500～5,000倍 前日/2回】
  - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 13 【2,000倍 前日/3回】

## ミナミキイロアザミウマ

### 留意事項

- 1 ハウス内では年中発生する。
- 2 主に葉に寄生する。
- 3 ミナミキイロアザミウマはきゅうりに被害（モザイク症状・えそ斑、生育抑制、枯死等）を及ぼす「キュウリ黄化えそ病」の原因ウイルス（MYSV）を媒介する。
- 4 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
- 5 コテツフロアブルは、幼苗期（1～3葉期）には薬害を生じる場合があるので、

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

使用しない。

- 6 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壌混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。
- 7 「キルパー」は、「適用病害虫（設定なし）」で、使用目的として、「前作の野菜類または花き類・観葉植物」の「アザミウマ類まん延防止」とした登録がある。使用方法は、「所定量の薬液を水で希釈し土壌表面に散布またはかん水する」。（きゅうりの病害虫まん延防止目的でかん水処理する場合は、被覆はあらかじめ除去して行い、処理中ハウスは3日間密閉する。）

#### 防除方法

- 1 ほ場周辺（特に育苗ほ周辺）の除草を行う。栽培期間の前後を含めて、ほ場内及び周辺の除草を徹底する。（X V 除草剤 参照）
- 2 前作終了後または、定植前の高温期にハウスをたん水し、密閉して蒸し込む。
- 3 育苗は専用の施設で行う。苗床は寒冷しゃで被覆し、侵入を防ぐ。
- 4 ハウス開口部には、寒冷しゃ（目合い0.4mm以下の白色ネットまたは0.8mm以下の赤色ネット）を張り、侵入を防ぐ。
- 5 露地栽培では、シルバーポリフィルムでマルチングを行う。
- 6 栽培終了後は、全株を地際から切断または抜根する。施設内を除草した後、施設を2週間以上密閉して死滅させる。発生ほ場の収穫残さは、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 7 下記の薬剤を施用する。
  - ・ [プリロッソ粒剤](#) 2 8  
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植時/1回】
  - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A  
【アザミウマ類 2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
  - ・ [アベイル粒剤](#) 2 8 4 A  
【アザミウマ類 2g/株 株元散布 育苗期後半～定植当日/1回】
  - ・ [モベントフロアブル](#) 2 3  
【アザミウマ類 500倍（50ml/株） 株元かん注 育苗期後半～定植当日/1回】
- 8 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【アザミウマ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【アザミウマ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [ベストガード水溶剤](#) 4 A 【1,000～2,000倍 前日/3回】
  - ・ [ディアナSC](#) 5 【アザミウマ類 2,500～5,000倍 前日/2回】
  - ・ [コテツフロアブル](#) 劇 1 3 【2,000倍 前日/3回】
- 9 ハウス内では天敵を利用する方法（放飼）もある。
  - ・ [スワルスキー](#) —（生）

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

【野菜類（施設栽培） アザミウマ類 250～500ml（約25,000～50,000頭）／10a  
発生直前～発生初期／—】

10 前作の栽培終了後から残渣撤去までに、アザミウマ類のまん延防止を目的として下記の薬剤を使用する。

・ [キルパー](#) 8 F

【適用病害虫（設定なし） 原液として60L／10a 前作の栽培終了後から残渣撤去まで（は種または定植の15日前）／1回】

11 ハウス内では、くん煙剤も有効である。（Ⅻ省力安全防除1（1） 参照）

## ネコブセンチュウ

### 防除方法

- 1 夏期にたん水して、生息密度を低くする。
- 2 苗床、本ぼを土壤消毒する。（ⅩⅢ土壤消毒 参照）
- 3 下記の薬剤を施用する。

・ [ネマトリンエース粒剤](#) 1 B

【15～20kg／10a 全面土壤混和 は種前または定植前／1回】

・ [バイデートL粒剤](#) 劇 1 A

【25～50kg／10a 全面土壤混和 は種前または定植前／1回】

・ [ネマキック粒剤](#) 1 B

【15～20kg／10a 全面土壤混和 定植前／1回】

## ウリノメイガ（ワタヘリクロノメイガ）

### 留意事項

- 1 中・老齢幼虫は葉をつづり合わせ、その中で葉を食害するので、防除は困難である。早期発見・早期防除を心がける。

### 防除方法

- 1 発生初期に、下記の薬剤を葉の裏にまでよくかかるように散布する。

・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【2,000倍 前日／2回】

・ [アファーム乳剤](#) 6 【2,000倍 前日／2回】

・ [ベネビアOD](#) 2 8 【2,000倍 前日／3回】

・ [BT剤](#) 1 1 A（Ⅸ野菜類の病害虫 3野菜類 参照）

## トマトハモグリバエ

### 留意事項

- 1 スタークル粒剤、アルバリン粒剤の成分ジノテフランの総使用回数は、4回以内（但し、育苗期の株元散布及び定植時の土壤混和は合計1回以内、定植後の株元散布は1回以内、散布は2回以内）。

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。

## 防除方法

- 1 育苗期の防除を徹底し、本ぼに被害苗を持ち込まない。
- 2 ハウスの開口部に寒冷しゃや防虫ネット（目合い0.8mm以下）を張り、成虫の侵入を防ぐ。
- 3 被害葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 4 育苗期または定植時に、下記の薬剤を施用する。
  - ・ [スタークル粒剤](#)、[アルバリン粒剤](#) 4 A
    - 【ハモグリバエ類 2g/株 株元散布 育苗期/1回】または
    - 【ハモグリバエ類 2g/株 植穴土壌混和 定植時/1回】
- 5 ほ場内や周辺部の除草を徹底する。
- 6 発生を認めたら下記の薬剤を散布する。
  - ・ [グレーシア乳剤](#) 3 0 【ハモグリバエ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [アフーム乳剤](#) 6 【ハモグリバエ類 2,000倍 前日/2回】
  - ・ [ディアナSC](#) 5 【ハモグリバエ類 2,500~5,000倍 前日/2回】
  - ・ [ベネビアOD](#) 2 8 【ハモグリバエ類 2,000倍 前日/3回】

注1：同じ農薬名でも、メーカーにより登録内容が異なる場合があるので、使用時には登録を確認してください。

注2：異なる農薬名でも、同一成分を含む場合があるので、成分の総使用回数はラベルで確かめて使用してください。